

エル・システマ×ピースボート9 1回クルーズ 船旅と日本公演の記録



1 はじめに



南米ベネズエラで展開されている「エル・システム」(ベネズエラ青少年オーケストラ・コーラスシステム)とは、1975年、ホセ・アントニオ・アブレウ博士によって設立された音楽教育システムです。41年前に11人の子どもたちで始まったこのプロジェクトは、今では70万人以上の青少年がかかわる大きな取り組みとなりました。この活動を通し、多くの子どもたちがオーケストラやコーラスに参加しながら社会性を身につけてきました。ピースボートは、生き生きと音楽を楽しむ子どもたちに魅せられ、また音楽の社会的利用に関心を持ち、2006年に交流や支援を始めました。エル・システムの母体であるシモン・ボリーバル音楽財団の運営や展望はいつも新鮮で、毎年より多くの子どもたち、大人たちが参加し、新しいアイデアを取り入れていることに気づきます。変化を続けながらも変わらない理念があります。それは「Social Inclusion」社会包括、社会を巻き込んでいくということです。より多くの人が関わっていく、という理念のもとに、どんどん変化を遂げてきたのです。

2015年秋、エル・システムの地域オーケストラのひとつ、「フランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラ(OJFM)」の指揮者、アンドレス・ゴンサレスさんによって、世界初の動く船上ヌークレオ(音楽練習所)設立のアイデアが生まれました。ピースボートの船旅で、言葉の壁を越えた音楽の交流をしよう、というものです。彼は、自分の楽器がなければ指導者のものを使えばいい、人数が多すぎれば声を出して歌おう、と呼びかけました。



2016年夏、参加したフランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラのメンバー25名は、多くの方々の関わり「Social Inclusion」のおかげで、34日間の船旅と6日間の日本滞在を終えることができました。関わったみなさんが、エル・システム41年の取り組みの成果である音楽家たちと触れ合うことによって、エル・システムを肌で感じていただけたのであれば幸いです。音楽にも壁がないのと同様に、人と人との間にも壁を作らないことにより分かり合えることを、いつも教えてくれるのです。今回生まれたエル・システムとみなさんとのつながりが、それぞれの場所で続いていくことを心から

祈ります。そしてエル・システムというベネズエラの音楽の奇跡が、世界へ広がり、子どもたちを暴力の脅威から遠ざけ、心の豊かさをはぐくむことを願い、ピースボートはこれからも活動を続けていきます。

2 目次

- ・はじめに
- ・目次
- ・フランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラとは
- ・メンバー紹介
- ・ベネズエラ寄港中の記録
- ・各寄港地での活動記録
- ・船内企画/船内生活の記録
- ・日本滞在の記録
- ・それから

3 フランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラとは

エル・システムの中の一つという位置づけとして、91 回クルーズに参加したフランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラは、ベネズエラの首都カラカスから車で約 40 分に位置する、ミランダ州グアレナ地区に生まれた地域青少年シンフォニーオーケストラです。団員は 14～22 歳、166 名。グアレナ音楽練習所では、午後子どもたちへの音楽教育、夕方からのオーケストラ練習が毎日行われています。ここに通う子どもたちの数は、2,000 名以上を数えます。過去に来日した、シモン・ボリーバル・ユース・オーケストラ（2008 年）、ユース・カラカス・オーケストラ（2013 年）、テレサ・カレニョ・ユース・オーケストラ（2015 年）に続くオーケストラと評価され、これまでにラテンアメリカ（コロンビア、ペルー、エクアドルなど）で公演を行っています。

旅が始まる前に

もともとは 56 人の参加を予定していた今回のプログラムは、様々な理由で一度なくなりかけました。しかしながら、多くの方々の望みと支援を受け、約半数の 25 人が参加することができました。船がベネズエラに寄港する前、現地でプログラムを準備していたピースボートのベネズエラ担当者は、彼らの練習所である「グアレナ音楽練習所」を訪ねました。丘陵地にレンガの家がならぶグアレナ地区にある練習所に到着すると、乗船を控え緊張の面持ちの 22 人の音楽家と指揮者のアンドレスが待っていました。エル・システムの音楽練習所では、外部からお客さんが来ると、必ず歓迎の曲で迎えてくれます。歓迎の演奏が終わると、一人ずつ丁寧に自己紹介をしてくれました。各自、旅の準備を始め、「船内生活のガイドブック」も随分読み込んだ様子です。何を学びたいか尋ねると、「日本語！」「日本食！」「友達をつくる！」など、前向きな返事が返ってきました。みんなやる気満々。希望に満ちた船旅の始まりでした。



音楽練習所での練習の様子

4 メンバー紹介



指揮 アンドレス・ゴンサレス

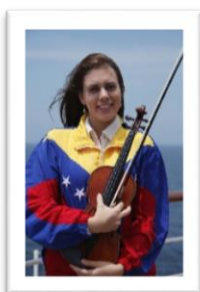
バイオリン



カサンドラ・ビエルマ



ウィリアム・サラサル



アマンダ・ゴンサレス



ヒルベニア・トバル



ダビ・マリン



ガブリエラ・ウビエルナ

ビオラ



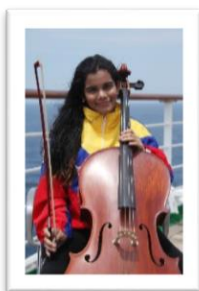
デリア・スニアガ



フランシフェ・ロペス



マリアンヘル・レンヒフォ



マリア・レアル



ペドロ・デベルデ



ホセ・フェルナンデス

チェロ

コントラバス

フルート

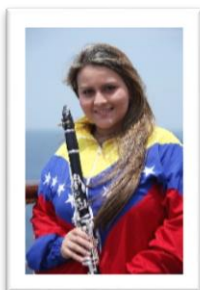
クラリネット

オーボエ

ファゴット



マリア・ミラノ



ルシア・クアドロス



マルティン・トロ



シベリス・ウルバエス

トランペット



ラファエル・アニャングレン

トロンボーン



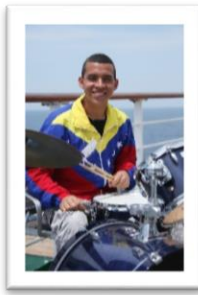
レオナルド・サンチェス
コーディネーター

ホルン



ロサ・アパリアノ
医師

パーカッション



ジョニー・オルテガ
カメラマン



ダニエル・サルセド



ソニア・ウルビナ



レイナルド・サンチェス



ファンパブロ・ヘドゥレル



5 ベネズエラ寄港中の記録



6月22、23日の2日間、ピースボートがベネズエラ・ラグアイラ港に寄港し、交流・見聞プログラム「奇跡の音楽教育『エル・システマ』の魅力にせまる」を実施しました。プログラムに参加したピースボート乗船者80名は、午前中はエル・システマ本部、「社会活動のための音楽センター」を訪問、午後は音楽練習所にて支援物資の贈呈、音楽交流を行いました。

本部では、リサイタル・ホール「フェドラ・アレマン」にて、シモン・ボリーバル・ユース・オーケストラに所属する音楽家たちが結成するアンサンブルの演奏を楽しみました。



社会活動のための音楽センター（エル・システマ本部）

音楽練習所（1日目はカラカス市内の“パライソ練習所”、2日目はバルガス州の“アルマンド・レベロン練習所”）では、子どもたちがサプライズで準備していた日本の曲を含め、数々の演奏披露を楽しみ、日本で集めた支援物資の楽器を贈呈しました。



出港時には、交流を行ったパライソ練習所の子どもたちによる船内コンサートが行われました。

6 各寄港地での活動記録

キュラソー

寄港した6月24日は、ベネズエラ独立の歴史にとって重要な「カラボボの戦いの日」。在キュラソー・ベネズエラ領事館・副領事マリ・モラレスさんのコーディネートで、領事館近くにある、「ボリーバル広場」にて献花と演奏を行いました。午後には、ウィレムスタッド市内ウィレルミナ広場にてコンサートが行われ、現地音楽グループと一緒に演奏を行いました。キュラソーのバーナード・D・ホワイトマン首相や教育大臣とともに、キュラソー市民、移住したベネズエラ人など、約400名が参加しました。



キュラソーの音楽家たちと

パナマ



クリストバル・コロン中学校での演奏会

エル・システムでアブレウ・フェロー（エル・システムのインターン制度）を経験し、その後パナマ・ナショナル・シンフォニーオーケストラに所属しながら、コロン市で音楽を教えているルイスA・モラレスさん（バイオリニスト）さんのコーディネートで企画されました。

場所は、港からバスで約10分に位置するクリストバル・コロン中学校。現地オーケストラメンバー向けワークショップや合同演奏会を開催、約200名の学生が参加しました。

グアテマラ

現地交流パートナーや自治体職員、その家族を船に招き、船内スターライト・ラウンジにてアンサンブルによるリサイタルを行いました。4つのグループが、クラシック、ジャズ、タンゴ、ベネズエラ伝統音楽を披露。エル・システムについて知ってもらうため、15分の紹介映像も上映しました。



7 船内企画/船内生活の記録

オーケストラパートナーによるサポート



オーケストラ・パートナーによる手作り卒業式

船内では、日本語教室や船内生活、船内企画全般や日本滞在中の協力など、様々な形で協力してくれるパートナーを募集しました。集まったのは 41 名。音楽や日本文化、スポーツを通して友情を築き、言葉の壁を越えたサポートをいただきました。

日本語教室：毎朝 10 時～10 時半、パートナーによる日本語教室が行われました。挨拶、自己紹介だけでなく、音楽レッスンに役立つ言葉や、日本国内での買い物やホームステイに役立つフレーズなど、便利な表現を習得。日本家屋の構造や、トイレやシャワーの使い方など、カルチャーショックを和らげる知識も身につけました。



日本語教室の様子



パートナー手作りのメンバー表

船上ヌクレオ/音楽練習所開設:

41名のパートナーを対象に、ほぼ毎日（寄港地日、イベント日除く）1時間のレッスンが行われました。各エル・システムメンバーに1〜3名のパートナーがつき、言葉の壁を乗り越え、楽器の扱い方、弾き方、楽譜の見方などを学びました。楽器、楽譜はメンバーのものを使用しました。最初の6回のレッスン内容を紹介します。

1回目、各楽器の紹介と体験コーナーで、それぞれの楽器の構造、音色の特徴、魅力を紹介します。後半は、楽器ごとに分かれ、パートナーのみなさんは興味を持った楽器をいくつか回り、自分がやってみたい楽器を選びます。最初から楽器を触り、可能性があれば、どんどん教えていきます。

2回目、各先生（エル・システムメンバー）について楽器を触るとにかく音を出します。日本とベネズエラの共通点でもあります。最初に弾く曲は「きらきら星」でした。すでにコツを得た人もいれば、なかなか音がでない人もいます。個人差があるのは当たり前、それは先生の共通認識です。

3回目、「リサイタル」と称して1人1人がステージに乗り、「きらきら星」を出来るところまで弾きます。担当の先生は、必ず生徒の名前と曲目を紹介し、立派なりサイタルの雰囲気を出します。特筆すべきなのは、ほかの楽器の先生も生徒も真剣に演奏を聴くこと。そして、大げさに拍手を送ります。笑い感動を引き起こします。

4〜5回目、合奏曲「プリメル・マンボ（初めてのマンボ）」の楽譜を配ります。音階（ドレミ）は世界共通ですので、先生が熱心に楽譜を読み上げながら、生徒が楽器を演奏します。この頃先生たちは、「ツヨク」「ハヤク」「モウイチド」など、日本語を上手に使い始めます。生徒の中にも、「オトラ・ベス（もう一度）」などスペイン語を話す人が出てきます。

6回目、全員がステージに乗り、合奏リハーサル。指揮者のアンドレスに注目し、覚えてた「プリメル・マンボ」を合奏。先生たちは自分の生徒の前（床）に座ったり、横に立ったりして、一生懸命指導します。一つ一つ音が出たことを心から喜び、いち早く“みんなで演奏することの楽しさ”を感じます。

練習は、帰国3日前まで続き、合計15回行われました。1時間のレッスンだけでなく、自主練習を行うひとも多く、各楽器で上達が見られました。集大成として行われたファイナル・コンサートでは、ピースボート91回クルーズオーケストラとして合奏曲2曲を披露しました。



参加したパートナーはどんな方々？

年齢は10代～60代で、音楽や楽器経験者もいれば、楽譜など見たことのない人もいました。慣れない楽器を弾くため、息が続かずクラクラしたり、指にまめができて切れてしまったり、と大変な思いをされた方もいました。音楽練習も半ばに差し掛かったとき、「私はなかなか覚えられず、足手まとい。やめたほうがいいか」という相談を受けました。素直に先生に話してみよう、ということになりチェロの先生に聞いたところ、「なんでやめるの？」「音楽を習う人のレベルはそれぞれで、それに合わせるのは先生のほう。もし無理をさせているようだったら、それは先生のせい」と言います。その言葉を胸に、すべての方が最後まで練習に通い、コンサートに参加しました。

楽器を学ぶ時、そのペースと方法はその人に合わせる、エル・システムらしい自然な発想でした。



コーラス練習

パートナー以外の乗船者も加わり、クラリネット奏者でありベネズエラでは子どもたちに歌も教えているルシア先生とペドロ先生とともに、コーラスの練習が行われました。ベネズエラの国歌同様に愛されている「アルマ・ジャネラ」と「ベネズエラ」を、エル・システムの演奏と合わせて歌いました。

演奏活動

船内では多くの場面で演奏を行いました。

コンサート（オーケストラ編成）

オーケストラ編成で行われたコンサーが、ブロードウェイ・ラウンジ（500名収容）で4回行われました。

1. オープニング・コンサート

クラシック、ラテン、民族音楽など多彩なレパートリーを演奏。「エル・システム」支援のためのオークションで落札されたプライベート・コンサート、オーケストラの指揮もこちらで実施されました。

曲目：アルマ・ジャネラ/ラ・パバナ/ベネズエラ など

2. ベネズエラ・デー・コンサート

エル・システム乗船中、船内では、「ベネズエラ・デー」を設定し、ベネズエラの文化や習慣に関する発表・展示、ベネズエラ伝統料理ディナー、ドキュメンタリー上映、そしてコンサートを企画しました。

曲目：マンボ、ダマ・アンタニョナ、トトゥモ・デグアレナ など

3. オークション・コンサート

船内で行われた「エル・システム チャリティーオークション」にて落札された、「プライベート・コンサート」は、船内全ての方に開かれたコンサートとなりました。ここでは、同じく落札された“オーケストラを指揮できる権”も実施されました。



曲目：バイオリン協奏曲「四季」第1番ホ長調「春」第一楽章/ビバルディ、管弦楽組曲第2番ロ短調/バッハ、アイネ・クライネ・ナハトムジーク 第1楽章/モーツァルト、ジョン・ウィリアムズ映画音楽メドレー、歌劇「カルメン」第一幕への前奏曲～アラゴネーゼ（第4幕間奏曲）～闘牛士の歌、ふるさと

4. ファイナル・コンサート

乗船中最後のコンサートでは、弦楽アンサンブル編成曲、オーケストラ曲に加え、パートナーによるオーケストラによる演奏、船内コーラスとの合奏が行われました。同行医師として参加したレイナルドさんも、クアトロ（ベネズエラ伝統楽器の4弦ギター）で参加。故郷ベネズエラを思いながら参加者と演奏した感動的な瞬間でした。

曲目：モーツァルト交響曲 25 番、メレンゲ（パートナー・オーケストラ）、チャマンボ（パートナー・オーケストラ）、アルマ・ジャンセラ（オーケストラ×コーラス）、花は咲く（オーケストラ×コーラス）、ベネズエラ（オーケストラ×コーラス）



コンサート（アンサンブル編成）

メンバーが4つのアンサンブルに分かれ、スターライト・ラウンジ（300名）にて、ラテン/ジャズ、クラシック音楽、ベネズエラ音楽、タンゴ/ボレロのリサイタルを行いました。

1. ジャズ/ラテン（金管+パーカッション）

曲目：ワン・ノート・サンバ（アントニオ・カルロス・ジョビン）、ソラール（マイルス・デイビス）、イパネマの娘（アントニオ・カルロス・ジョビン）、ビリーズ・バウンス（チャーリー・パーカー）、キャラバン（デューク・エリントン）など

2. クラシック（弦楽4重奏）

曲目：モーツァルト弦楽四重奏第1番2楽章、バッハG線上のアリア、パッヘルベルのカノンなど

3. タンゴ/ボレロ（弦楽8重奏+パーカッション）

曲目：ポル・ウナ・カベサ（カルロス・ガルデル）、リベルタンゴ/アディオス・ノニーノ/オブリビオン（アストル・ピアソラ）など。

4. ベネズエラ伝統音楽（木管5重奏）

曲目：ダマ・アンタニョーナ（レオンシオ・マルティネス）、アルメンドラ（アルデマロ・ロメロ）、ワルツ（アントニオ・ラウロ）、ベネズエラ（パブロ・エレロ・イバルス）、アルマ・ジャンセラ（ペドロ・エリアス・グティエレス）など



エル・システムの特筆すべきシステムの一つに、「編曲（アレンジ）システム」があります。船内参加者が、「ジョン・ウィリアム映画音楽メドレーをやってほしい！」と言うと、指揮者のアンドレス・ゴンサレスがベネズエラ・カラカス本部にリクエストを出し、船に乗っているメンバー編成用に記譜してもらいます。「レ・ミゼラブルの『民衆の歌』と一緒に歌いたい」という申し出があれば、メロディーだけの楽譜を受け取り、それを本部に送り、2日ほどで同メンバー編成オーケストラ譜を受け取ります。アンドレ自身も、難しい曲を簡単に書き換える作業を行います。様々な場面に対応する編成で演奏するエル・システムならではの、ハイレベルな技術を垣間見ました。

船内企画に参加

ピースボート事務局主催のイベントや自主企画にも多数参加しました。



運動会

ファンファーレ 金管の3名がファンファーレを吹き、かっこよく開会しました。

餅つき大会

生まれて初めて餅つきを体験。その後試食をしましたが、お口には合わなかったようです。

卓球大会

メンバーは航海中、卓球愛好家のみなさんに仲間にいれてもらい、よく卓球を楽しんでいました。自然と誘い合い、大会にも出場。みなさんに応援してもらいながら、思う存分プレイしました。

自主企画発表会

参加者のリクエストに応え、レ・ミゼラブルの「民衆の歌」を演奏しました。これはフラッシュ・モブ（ロコミ呼びかけの突如のパフォーマンス）で、スタッフへのサプライズとして行われました。

日本文化体験

エル・システムメンバーが日本文化を体験できるよう、船内有志のみなさんによる日本文化体験企画が行われました。着付け、茶道、書道、昔の遊び、獅子舞など、彼らにとってどれも新しいもののばかり。オーボエ奏者のマルティンは、茶道で学んだ「一期一会」の哲学がすばらしい、とコメントしました。

ベネズエラ食デー

1か月以上自国を離れるエル・システムメンバーのために、週に一度の割合でベネズエラ料理を準備しました。トウモロコシの粉で作るアレパ、具沢山のスープのサンコチョなど、懐かしい家庭料理ばかり。メンバーは、ベネズエラで食べるものと全く同じ！と感激しました。



平和イベント 平和イベントでは、フルート（マリア・ホセ）＋弦楽4重奏で、バッハの管弦楽組曲第2番口短調を演奏しました。チェロのペドロ・デベルデはメンバーを代表して、いまのベネズエラについて語り、メッセージを伝えました。

平和イベントで発表した、ペドロ・デベルデの作文

ベネズエラのいま 最近ベネズエラの経済状態は非常に悪くなっています。食べ物だけでなく生活必需品ですら不足していて、多くのベネズエラ人達の生活の質を下げています。数か月前から、練習が終わったら直ぐに食べ物を求めてスーパーマーケットへ行かなくてはならなくなりました。そしてピースボートに乗船する少し前、多くのベネズエラ人達が陥っている状況を経験しました。それは午後5時から次の日まで、たった1キロのトゥモロコシの粉を買うために並ぶ事です。これは私だけが直面している問題ではなく、他のオーケストラのメンバーにも言える事です。私の場合は食糧を求めて並ばなければならない為に大学の勉強時間、そして楽器を練習する時間が減りました。この経済危機は経済だけではなく、社会にも影響を及ぼしています。私達の日常に窃盗や殺人といった暴力的なものが入り込んできました。私はヌークレオと呼ばれる教室でエル・システムの先生として教え始めましたが、一人の生徒がピストルを持つようになりました。それは防衛の為に彼の弟がギャングの闘争に巻き込まれ、家族を殺すと脅かされ始めたからです。

理想の未来 私が属しているオーケストラの世界では周りの人を尊重する事、勉強する事に価値を、毎日やる気を感じています。私は本当の家族のような仲間達と沢山の良い時を過ごしています。音楽を通してまさに冒険のような人生をおくっています。全ての人が武器ではなく楽器を手にする事で出来たら、もっと沢山のオーケストラと合唱団が出来たら、もっとサッカーや、野球、ダンスをしたら、絵を描いたり、より良い教育を受ける事が出来たら、もっと多くのアートの空間が出来たら。子供たちが、若者が、親しい人達が想像力、詩的、そして豊かな感情の大きな力に価値を見出し、認識できますように。そしてそこにオーケストラや合唱団、そして私達エル・システムの世界を入れてくれますように。ありがとうございました。（写真左がペドロ）



ファンドレイジング

様々な形で多くの方々からのご支援をいただきました。



船内オークション	526,500 円
チャリティーサイト CD 販売	226,950 円
船内募金	210,217 円(他通貨含む)/ 1,171.00USD
缶バッジ販売売り上げ	140,675 円

計：1,319,342 円/1,171.00USD

多くの方々からのご支援、ありがとうございました。

8 日本滞在の記録

ホームステイ

日本滞在中の6日間、エル・システムのメンバーは、都内および東京近郊の家庭にホームステイさせていただきました。ホストファミリーの中には、ピースボートやエル・システムを知らない方々、受け入れ自体が初めての方々もいらっしゃいました。

ホストファミリーのみなさんは、到着前からスペイン語でのあいさつを学んだり、彼らの好きな食べ物や興味があるものを準備したり、滞在中は食事と移動の全面的なサポートに加え、コンサートへの参加、観光や文化紹介など、限られた時間ながら、エル・システムの暖かい日本の家族となっていただきました。

(ご協力いただいたファミリー：伊藤匡児ファミリー、吉原功ファミリー、平野和子ファミリー、志賀久美ファミリー、藤井麻由ファミリー、本山誠ファミリー、鳥谷部愛ファミリー、鈴木勝博ファミリー、越智由里子ファミリー、山野あずさファミリー、張京和ファミリー計11ファミリー)



駐日ベネズエラ大使館主催 ナショナルデー・コンサート/7月28日@第一生命ホール

ベネズエラ・ボリバル共和国独立205周年を祝う記念コンサートに出演しました。

コンサートには、各諸国大使館関係者ほか、船上生活を共に過ごした方々、ホストファミリーのみなさんが訪れました。このコンサートでは、後日エル・システムのメンバーが訪問する熊本の大地震被災者への募金が行われました。



ヤマハ 楽器メンテナンスワークショップへの参加/7月29日午後 @YAMAHA 銀座店

訪問の目的は、ヤマハが世界の楽器使用者に向けて行っているメンテナンスワークショップを受けてもらうためです。今回来日したメンバーはベネズエラでも子どもたちに音楽指導を行っているため、わかりやすい冊子を使った説明は実践で使える有益なものです。

エル・システムでもヤマハの楽器を使っているメンバーは少なくありません。慣れ親しんだ楽器の拠点を初めて訪れることは、感動的だったようです。アトリエ見学では、オーダーメイドで作られているホルンや、世界の有名音楽家のメンテナンス中の楽器が所狭しと置かれていました。オーボエ奏者のマルティン・トロは持参した自分の楽器をプロの修理人に見てもらいました。調子が悪かったオーボエは、完璧に調整され本人はとても喜びました。

最後に、ショップでお買い物しました。楽器の修理も行うメンバーの1人は、ベネズエラでは手に入りづらい弦楽器の支柱（puente）をいくつか購入していきました。また、スペイン語のメンテナンスガイドブックと、クリーニングセットなどをいただきました。ヤマハの精神「楽器を大切にっかけてほしい」に触れ、貴重な1日となりました。



ヤマハ銀座店正面にて

エル・システム・ジャパン音楽交流 / 7月30日エル・システム・ジャパン相馬



2011年東日本大震災で被害を受けた福島県相馬市では、ベネズエラのエル・システムをモデルとした音楽活動が開始されました。今回、エル・システム・ジャパンの菊川穰さんのコーディネートで、相馬練習所の訪問が実現しました。

早朝渋谷駅に集合したメンバーは、長い移動のあと、相馬市で待っていた子どもたちと一緒に演奏を

楽しみました。興味深かったのは、指揮者アンドレス・ゴンザレスの指導。「バイオリンはみんながあこがれる存在だから、『私が一番』という感じで気品あふれた様子で。ピオラはそれをうらやましそうに横から見ている。チェロはそんな二人の様子をやさしく見守りながら弾いてみてね」子どもたちに教える彼らのまなざしは、ベネズエラでやんちゃな子どもたちを指導するときの様子そのものでした。

被災地・熊本での演奏 / 7 月 29～30 日 熊本県立劇場主催コンサート および 熊本県立済々黌（せいせいこう）高等学校にて音楽交流

2016 年 4 月に大地震に見舞われた熊本では、ピースボート災害ボランティアセンターが、震源地であった益城町にて災害支援活動を開始しました。避難所の一つで、活動場所でもあった広安小学校では、音楽を通して復興を目指す人々を励ます取り組みも行われました。

今回、熊本芸術劇場が企画した「くまもとアートキャラバン」の枠組みで、来日メンバーのうち弦楽 4 重奏（カサンドラ・ビエルマ、ウィリアムス・サラサル、フランシエ・ロペス、ペドロ・デベルデ）が熊本を伺い、熊本市現代美術館で演奏する機会をいただきました。彼らの演奏のあとには、世界的に活躍する指揮者、佐渡裕さん率いるスーパーキッズ・オーケストラの演奏もあり、音楽を通じての交流が行われました。

翌日は、熊本県立済々黌高等学校をお伺いし、吹奏楽部の演奏を聞き、弦楽部のみなさんと一緒に演奏しました。ペドロは、「大きな地震で、みなさんは本当につらい思いをされたでしょう。私たちの音楽は、亡くなった人々やその家族、そして今も怖い思いを持ち続ける方々に捧げます。音楽の力を信じましょう」と伝えました。

演奏曲：G 船上のアリア（バッハ）、弦楽四重奏第 1 番、弦楽四重奏第 5 番（モーツァルト）

済々黌高等学校での合奏風景



お別れ会 / 7 月 30 日 場所：ピースボートセンターとうきょう

旅の終わりを祝し、サポートしてくれた皆さんへの感謝を込めて、ピースボートのボランティア手作りのお別れ会が行われました。参加したのは、ベネズエラ大使ら大使館関係者、ホストファミリーのみなさん、パートナーの皆さん、共演したエンランセ（社会人コーラスグループ）のみなさん、エル・システムメンバーに加え、ピースボートスタッフ。アットホームな雰囲気の中、最後の別れを惜しましました。



9 メンバーのメッセージ

マルティン・トロ

私たちと会話するために、多くの人がスペイン語を学んでくれました。その温かさには、心から胸を撃たれました。スタッフのみなさん、船内で知り合った友人のみなさん、ホストファミリーのみなさん、通訳の方に感謝を伝えたいです。

そしてパートナーのみなさんは、私たちが船や日本なのに来るで、ホームだと感じさせてくれました。本当にありがとうございました。

マリア・ホセ・ウルピナ

すべての経験、みなさんにいただいた愛、おもてなしに、無限大の感謝を伝えたいです。

ホストファミリーの妹たちに、日本の思い出をありがとう。

アマンダ・ゴンサレス

船内では、「平和イベント」に心を動かされました。乗船されていた方に、それぞれのストーリーがあり、それを伝えている姿に心を打たれ、状況をよりよい方向に動かそうという気持ちに、私もつき動かされました。世界を変えて、よりよい社会にする一部になりたいと思いました。

このような、様々なイベントを通じて、船のみなさんと仲良くなれたこと、忘れることはありません。

フランシフェ・ロベス

船の上の運動会は、本当に印象的でした。私たちは優勝したけれど、そのことよりも、年齢に関係なく、みんなが一緒になって楽しみながら参加していることが、とても素晴らしかった。ピースボートに乗船できたこと、そして日本に行けたことに対して、心から感謝したいです。折り紙をはじめ、たくさんのことを教えてくれて、本当にありがとうございました。

ウィリアム・サラサール

ピースボートの企画を通して、世界には暴力や貧困が存在していること見直し、これから何をすべきなのかを考える機会を持つことができました。日本では、日本の家庭で暮らし、毎日おいしい食事をいただき、話を聞くことができました。この思い出を、いつまでも心にとどめておきたいと思います。

マリア・レアル

船の上、また日本で、心の豊かな、優しい人々にたくさん出会うことができました。言葉を覚えて迎え入れてくださった船のみなさん、ホストマザーに心から感謝したいです。ピースボート9 1 回クルーズ・ファミリーの一員にしてもらえたような気持ちです。本当にありがとう。

マリアンヘル・レンヒホ

船上で、ピースボートの人々が、私たちの第二の国歌「アルマ・ジャネラ」と「ベネズエラ」を歌ってくれた時は、涙が出そうでした。ホストファミリーが、大きな荷物を運んでくれたことにも心から感謝しています。私たちに注いでくれたみなさんの愛を、いつまでも忘れません。

ソニア・ウルビーナ

各港で行ったコンサートや交流はとても意義のあるものだったと思います。船の上では、黄色団として参加した運動会には感動しました。企画を作るために、みんなで準備する姿にも驚きました。私たちに対する忍耐、心遣い、そしてみなさんの愛に、心から感謝します。

ヒルベニア・トバル

ピースボートの企画はどれもユニークで、とくに消滅日（日付変更線を越える日）は面白かったです。（私たちは超スピードで演奏をしました！） 私たちをささえてくれた友達、がんばってくれたパートナーのみなさん、ホストファミリーにありがとうと言いたいです。私も、自分の国に帰り、平和と友好のために頑張りたいです。

ダビ・マリン

たくさんのことを学び、深い知識と友情を築くことができたピースボート、そして、忙しいスケジュールで一緒にいてくれたホストファミリーに心から感謝したいです。

ガウリエラ・ウビエルナ

船内で開催してくれた、文化体験が印象的でした。日本文化の繊細さ、美しさについて触れることができました。私たちベネズエラ人にとって、なかなかできない経験です。感謝！

レオナルド・サンチェス

船の中で、ヒロシマ・ナガサキに関するお話会に参加することができ、ヒバクシャの方の経験を聞いて衝撃を受けました。ひとつの戦争が残すものの大きさ、貧困、飢餓、悲しみ、恨み...、被害を受けるのは、罪のない人々なのです。ピースボート船上にいることは、夢のようでした。こんなに優しい人々と出会い、友情をはぐくみ、お互いの文化を紹介しあうことができるなんて。「サイコー！」

デリア・スニアガ

この旅を実現する事が出来て、心から感謝しています。沢山の素晴らしい人達に出会いました。ある女性は、とても美しい日本の踊りを教えて下さいました。言葉の問題で、時々コミュニケーションが難しい事もあったけれど、ジェスチャーや紙に言葉を書いてお互いに理解し合う方法を探しました。

船内で出会う人達は本当に親切で協力的でした。私の誕生日には、一人の女性が七タイベントで作っていたとても美しい絵をプレゼントしてくれました。別の日には折り紙を教えてくれて、他の女性たちも助けてくれました。犬や狼、色々な形を紙で折る事は少し難しかったです。通訳の皆さん、そしてGET（洋上語学プログラム）の先生達もとても親切にしてくれました。レオニー（GET教師）のズンバ（ZUMBA）というダンスのクラスも、とても楽しかったです。

この旅の沢山の美しい思い出、そして経験。全てを恋しく思うでしょう。

毎朝日本語を教えてくれた水パのみなさん、音楽練習所に通ったみなさん、スタッフのみなさん、そしてホストファミリーのみなさん、ありがとう。もちろん、日本の文化や習慣も興味ぶかく感じましたが、毎日私に与えてくれた美しいなにかを心にとどめて帰国します。人間的な温かさ、それぞれの方の笑顔、いつまでも忘れることはありません。

私が学んだ「みんなで協力しあって何かを作り上げる」ということを、今後の自分の教育活動に取り入れていきたいと思います。



10 それから

帰国後の彼らは、もともと所属していたフランシスコ・デ・ミランダ・ユース・オーケストラに戻り、エル・システムの最高峰オーケストラ、シモン・ポリール・ユース・オーケストラと極めて近いペースで交響曲の演奏会を行う傍ら、複雑な社会状況の中、子どもたちに音楽を教え続けています。エル・システムの母体であるシモン・ポリール音楽財団のホームページには、定期的に彼らの活躍姿がアップされています。医師として乗船したレイナルドは、お連れ合いとともに障がいを抱える子どもたちへの音楽セラピーを行っています。それぞれのメンバーが、友情を築いた日本のみなさんと、誕生日メッセージの交換や日本語の練習をしているようです。

シモン・ポリール音楽財団 ホームページより

2016年11月23日水曜日、エル・システム本部「社会活動のための音楽センター」にて、アンドレス・ゴンサレス指揮フランシスコ・デ・ミランダ・シンフォニーオーケストラによるコンサートが行われた。オーケストラ編成 113 名によって演奏されたのは、フランス人作曲家モーリス・ラヴェルによる「ラ・ヴァルス」。バレエ音楽として依頼を受け 20 世紀前半に作曲されたこの曲は、「バレエ・リュス」の主催者であったロシア人、セルゲイ・ディアギレフに受け入れられず、バレエ音楽として受け入れられなかったものの、オーケストラのための舞踊曲として書き換えられたものだ。

オーケストラが演奏したもう一曲は、グスタフ・マーラー作曲交響曲第 1 番「巨人」。1888 年、この曲が完成したときにも、あまりの型破りさに人々に歓迎されなかったという。この両曲の複雑さゆえの美しさは現在普遍的なものとなり、フランシスコ・デ・ミランダ・オーケストラのメンバーも深く学び、研究し、生み出された演奏は新たな大喝采を浴びた。



エル・システム本部 社会活動のための音楽センター シモン・ポリール・ホールにて

(文責:松村真澄 ピースボート国際部)